

1. 教育の責任

主として健康栄養学専攻において、管理栄養士国家試験受験資格に関する教科（応用栄養学分野など）&栄養士実力認定試験、および医薬品登録販売者試験の合格のための科目を担当している。一覧を以下の表に示す。

授業科目	学科・専攻	学年	単位数	授業形態	必・選	免許
応用栄養学Ⅰ	家政・健栄	2	2	講義	必	管理栄養士
応用栄養学Ⅱ	〃	2	2	講義	必	〃
応用栄養学実習Ⅰ	〃	2	1	実習	必	〃
応用栄養学実習Ⅱ	〃	2	1	実習	必	〃
栄養管理論	〃	2	2	講義	必	〃
運動生理学	〃	2	2	講義	必	〃
解剖生理学実験	〃	3	1	実習	必	〃
キャリア開発Ⅱ	〃	2	1	講義	選	医薬品登録販売者
スポーツと食事	〃	1	1	講義	選	
運動生理学（短大）	〃	2	2	講義	必	栄養士（短大）
課題研究	〃	3-4	6	研究指導	選	

上記以外にも、栄養情報処理演習、健康栄養学総合演習ⅡⅢ、キャリア開発ⅢⅣ、セミナーⅠⅡの授業をオムニバスで担当している。研究室では独自に管理栄養士国家試験の勉強会を行っている。また課外（学友会）にて、授業内容以上の知識や経験を望む学生に対してスポーツ栄養サークルやソルトサークル、麵研サークルを主宰し、学びたいとする学生へのニーズに応じている。

2. 教育の理念

学生が主体的に学べる、その手助けというのが私の教育の理念である。栄養学も幅広く、常識的に考えれば全ての分野に等しく興味を持つ人間（学生）は殆どいない。したがって、それまでの学生の人生経験から、興味を持つ（持てる）栄養の分野に1年次から関心を払ってもらいたいと考えている。4年間は長いため、きっかけはその狭い分野だとしても、国家試験合格まで栄養学に興味を持ち続けるための推進力となり得るからである。この理念を実現するために、興味のある学生が1年次から自主的に学

べるように、スポーツ栄養サークルやソルトサークル、麵研サークルなどの学びの箱庭を用意している。スポーツ栄養であれば2年次の運動生理学、ソルトであれば2年次の応用栄養学などで、管理栄養士取得のための必修授業として学ぶが、興味のある学生はその前から学んでもらい、意欲的に翌年度の授業に取り組んでもらいたい。

3. 教育の方法

管理栄養士に関わる授業においては、数年後の国家試験の合格につながる授業をしたいと考えている。たとえば一部の教科（応用栄養学Ⅰ・Ⅱ）では、まずは章ごとに講義を行う。次いで過去問をもとにしたマンダラシート作りを章ごとに演習として行わせ、過去問の分解、ならびに不明単語を調べさせている。次いでミニテストやまとめテストなどでは過去問をアレンジしたものを学生に問うている（深く内容を問うため過去問はそのまま出題しない）。講義→マンダラ演習→過去問アレンジテストを通じて、学生は国試合格に向けた実践力を身に着ける。また他の教科（栄養管理論）では、食事摂取基準の数値をグラフ化し考察する演習を取り入れている。この授業においても講義→グラフ演習→過去問アレンジテストの流れで行っている。医薬品登録販売者の合格に向けたキャリア開発Ⅱにおいても薬の名前を覚えるために単語帳を作らせ、それをカルタ形式で覚えさせている。これらの工夫は、無理なく効率的に勉強をしてもらうために行っており、学生からも評価を得ている。

4. 教育の成果

2024年度に実施した授業評価アンケートの結果の総合評価を以下に示す（主たる授業のみ）。

授業科目	点数	授業形態
応用栄養学Ⅰ	4.72	講義
応用栄養学Ⅱ	4.64	講義
応用栄養学実習Ⅰ	4.76	実習
応用栄養学実習Ⅱ	4.50	実習
栄養管理論	4.57	講義
運動生理学	4.62	講義
解剖生理学実験	4.68	実習
キャリア開発Ⅱ	4.81	講義
スポーツと食事	5.00	講義
運動生理学（短大）	4.43	講義
課題研究	---	研究指導

対象学生が違うため前年度との比較は難しいが、絶対評価として自分自身の目標として講義教科では4.0以上、実習教科では4.5以上を目標にしている。おおむね達成されているが、結果に甘んじず5.0に

近づける努力を惜しまないようにしたい。他方、4年次に複数回行っている国家試験の模試の応用栄養学分野の学内平均点が、全国平均点を上回らないことが近々の課題である。例えば1月に行った模試（かんもし3）の全16問の応用栄養学分野では学内平均点が9.3、全国平均点が10.9と、4年生の受ける最後の模試においても上回ることが出来なかった。

5. 教育の改善と目標

短期的な課題では、2年次に応用栄養学ⅠⅡなどの単位合格を学生に出しても、その学生がそのまま国家試験の合格に結びついていない問題である。過去問のアレンジをミニテストなどで出しているが、一部の学生はその範囲しか勉強してこないため予備力の増加（関連分野を含んだ理解）には至らない。ミニテストの難易度を上げて、関連分野も勉強してきた学生にのみ単位を出すべきかが近視点的な課題である。改善として過去問5年分ではなく10年分を学びの範囲として提案している。

長期的な課題には国家試験合格者の増加のために応用栄養学分野の教員としてどのようなことが出来るのかである。特に1年次から国家試験に関心を向けさせるのは難しい。そのため一部の応用栄養学分野（スポーツ栄養、塩分など）では、希望者にサークルを通じた早期教育を行っているが、これをどう国家試験に結び付けていけるのかが、私の持つ慢性的な課題である。教科担当者として改善案は見つからず、私以外で応用栄養学を教える者を用意し、2つの視点（理解）から学ばせるなど、専攻やセンターなどと共同した取り組みを行ってみたい。

最後に目標について述べる。模擬試験や栄養士認定試験などで、全国平均よりも上回るクラス平均点を定期的に出せるような教育を目標としたい。そこには応用栄養学であれば川俣というような学生の信頼関係が不可欠であり、厳しいだけでなくほめて育てるような教育を模索したい。加えて、学会等に定期的に参加し新しい知見を積極的に授業に反映することを大事にしたい。且つ学生も研究室に所属すると課題研究として関連分野を深く学ぶようになるので、授業だけでなく応用栄養学分野の研究室運営もしっかり行いたい。研究室の活動については数値化は困難であるが、研究室所属学生の国試合格率を全国平均以上にしたい。